

音楽都市のエコシステム

Music City Eco system
ミュージックシティエコシステム

音楽都市インタビュー



High-Life

公益財団法人ハイライフ研究所

■インタビュー 酒見翔太氏、富田息吹氏

日時：2023年11月21日（火）14:00～16:00

場所：福岡音楽都市協議会事務局（福岡）



酒見翔太（さけみ しょうた）

SOLSCAPE（ソルスケイプ）株式会社代表

福岡音楽都市協議会 企画運営委員

1987年福岡県生まれ。大学卒業後、新卒で2010年に三越（福岡三越、のち岩田屋三越）入社。2017年より3年間天神のエリマネ団体「We Love 天神協議会」に出向。

2021年三越を退職、設立したばかりの福岡音楽都市協議会の初代事務局員となる。

2023年4月映像、イベント、ウェブなどのクリエイティブ制作会社 SOLSCAPE 設立。現

在、音楽都市協議会では、企画運営委員として、公共空間を活用した「FUKUOKA

STREET LIVE」の運営事務局を担う。学生時代から音楽活動を始め、現在もDJとしても活動している。



富田息吹（とみた いぶき）

福岡音楽都市協議会 コーディネーター兼事務局員

2000年福岡県生まれ。福岡大学人文学部歴史学科に在籍しながら、福岡市を中心にDJや歌、執筆、ラジオ出演などの活動を行う。1960年代のキャバレーで営業していたバンドをイメージして結成した「メル富田とニュー大名クォーターズ」でボーカルを担当。戦後福岡の音楽史を研究し、福岡音楽都市協議会のポータルサイト「キュレーションメディア OTOJIRO」にて記事を連載。2024年度から酒見氏の後任として事務局員に着任。

音楽によって

音楽人材の育成、活動の場づくり、産業振興など

都市の多様な要素を結びつける

—————福岡音楽都市協議会について教えてください。

富田：2021年4月に設立された福岡音楽都市協議会は、「福岡を日本、アジアを代表する音楽都市へ」を目標に、福岡市域の「音楽産業振興」や「都市ブランディング」、「異文化交流」に取り組んでいます。

設立経緯としては、当時コロナ禍で活動の場所を失っていたアーティストの方々の活動機会を増やしたいという思いが強く、福岡市の応援を受けながら立ち上がった任意団体になります。

—————運営費などは、どこからどのような形で賄われているのですか。

酒見：この任意団体の特徴は行政が関わっていることです。顧問には福岡市長が、監事には福岡市経済観光文化局の理事が就任しています。また企画運営委員にも、経済観光文化局の文化振興課とコンテンツ振

興課から、それぞれ担当職員が複数名参加しています。つまり、音楽における文化振興と産業振興を促進するために、福岡市が事業費を充当することで、行政の施策実現にも繋げることを目的としています。

2023年現在は市からの事業費が大部分を占めていますが、独自で自主財源の獲得にも努めており、そのひとつとして賛助会員を募って年会費を頂戴して活動費に当てています。また、個別の事業によっては企業協賛をいただいたり、福岡音楽都市協議会仕様の自動販売機も設置していただきます。これは、コカ・コーラさんが日本全国で取り組んでいる、まちづくり支援自販機で、その売上の一部を協議会に寄付していただくような仕組みです。設置個所は、現在2か所、計3台あります。（*2024年6月現在、3か所・計4台）

———酒見さんは初代の事務局員とのことですが、どのような経緯で事務局に入られたのですか。

酒見：2017年から3年間、エリアマネジメント団体である「We Love 天神協議会」に出向して、「歩いて楽しいまち」を実現するために、歩行者天国の実施や、地場企業を巻き込んだコミュニティの形成、天神周辺の交通渋滞緩和など行政と調整しながら行ってきました。そこで天神地区のいろいろな企業とのつながりができ、まちづくりにおける考え方や実務を学びました。

新型コロナウイルスを機にクリエイティブに関わる業界で起業しようと思い、まずは準備期間として転職を挟もうと決め、転職した先が「福岡音楽都市協議会」でした。

“都市協議会”とある通り、いわゆるまちづくりにも関係するところなので、「We Love 天神協議会」での経験が活かせるのではないかと思ったことと、私自身20歳の頃からアーティスト活動をしており、今も現役でDJをやっているので、事務局の仕事をしながら、業界とのつながりも作りたかったからです。それに、福岡のまちが好きで、音楽を通して福岡を盛り上げていきたいという思いがすごく強かったです。

福岡音楽都市協議会は任意団体で、正式に私が在籍していたのは「公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団」です。私は財団の嘱託職員として2年間、福岡音楽都市協議会事務局の専任となりました。事務局は二人ですが、財団の総務課長が事務局長を兼任しているので、専任は一人です。私の後任が富田さんです。

2年間の事務局経験を経て、2023年4月に「SOLSCAPE（ソルスケイプ）株式会社」を友人と一緒に立ち上げ、協議会には現在も企画運営委員として在籍しています。協議会事業の中に「FUKUOKA STREET LIVE」という、公共空間を活用したアーティストによるパフォーマンスの仕組みがありまして、その事務局を弊社が業務委託を受けています。

富田：「FUKUOKA STREET LIVE」は、コロナ禍でのアーティスト支援の施策として福岡市が開始した事業を、福岡音楽都市協議会が引き継いで運営している事業になります。

企画運営委員のみなさんは、福岡市域を拠点に音楽活動をされているあらゆるジャンルの方々と、それぞれに思いを持って音楽都市協議会の活動に賛同し、参加いただいています。企画運営委員長は、協議会の発起人でもある深町健二郎さんで、毎年9月に毎週末、福岡市域を中心に開催される複数の音楽イベントを「Fukuoka Music Month」として束ねるなど、まちの音楽振興に貢献されている方です。

酒見：「Fukuoka Music Month」は、偶然9月の毎週末に音楽イベントが開催されているので、福岡市外にも届くようなPRをやっていきましょうということで、共同プロモーション的に立ち上がった団体です。深町さん自身も元々バンド活動をされていて、その後KBCの人気ローカル番組「ドオーモ」では初代MCを務める他、ラジオ各局のパーソナリティなど幅広く活動されています。福岡音楽都市協議会設立に関しても、そのつながり

の広さを発揮していただきました。

公共空間を活用したアーティストによるパフォーマンスは 観光コンテンツにもなりうるし、ナイトタイムエコノミーの可能性もある アーティストのメンタルも鍛えられる

—————「FUKUOKA STREET LIVE」について説明していただけますか。

酒見：「FUKUOKA STREET LIVE」は、福岡音楽都市協議会が運営するストリートライブ事業です。出演アーティストには、ライセンス登録のための事前の審査に通過した方だけが、まちなかでパフォーマンスできるという仕組みです。

以前から福岡にもストリートライブの文化はあり、許可無く歩道でパフォーマンスを行う方が多数います。それゆえに近隣の苦情や警察から注意を受けてしましますが、この「FUKUOKA STREET LIVE」の制度を活用することで、アーティストのみなさんは伸び伸びと演奏いただける環境づくりが実現できています。

私は DJ 活動をやっているのですが、これまでクラブなどの室内空間でしか出演機会がありませんでした。しかし最近では広場や公園など公共空間での DJ が福岡でも浸透しつつあります。公共空間でのパフォーマンスによって、本来の活動拠点であるライブハウスやクラブにも遊びに来てもらうきっかけにもつながっています。公共空間を活用したアーティストによるパフォーマンスという仕組みづくりと、まちなかで音楽などが恒常的に楽しめる文化を醸成させることが重要だと思っています。

観光コンテンツの文脈で言えば、夜の時間帯にアーティストがパフォーマンスすることで観光体験へつながり、ナイトタイムエコノミーの促進に寄与することにもなりますし、人材育成の観点では、普段はライブハウスなどの音楽好きやファンの方が訪れることの多い場所で演奏しているアーティストが、お客さんもシビアで厳しい目で見られることもあるオープンスペースでパフォーマンスをすることで、メンタルも鍛えられると思います。「FUKUOKA STREET LIVE」はいろいろな可能性があると思っています。

—————現在、何か所くらいで行われているのですか。

酒見：民間施設の公開空地や公園、市の動植物園や美術館など、7 か所です。

※2024 年 6 月時点では 9 か所。

パフォーマンスされる曜日は基本的に土・日・祝日になります。アーティストが演奏したい日時に予約・実施が可能です。

—————現在、登録しているアーティストの数はどれくらいですか。

酒見：104 組程ですね。「音楽」、「ダンス」、「大道芸」、「アート」と 4 つのジャンルに分かれていて、「FUKUOKA STREET LIVE」のサイトに各アーティスト情報を掲載しています。「アート」は展示ではなく、ストリートで行うライブペインティングなどを指しています。（*2024 年 6 月時点で 128 組）

ライセンス登録アーティストの募集は年 1 回で、常に多くの方々から登録したいという問い合わせがあります。

登録アーティストが 1 年間の内に 1 度もパフォーマンスをしなかった場合は登録解消されるというルールを設けているので、継続的に登録アーティストとして活動するにはパフォーマンス実績が必要になります。

—————先ほどシビアなお客さんの前で演奏することでアーティストのメンタルが強くなるとおっしゃっていま

したが、それ以外にストリートという公共空間がアーティストにとって大事な理由は为什么呢。

酒見：アーティストの活動の場は、基本的にライブハウスなどのリアルな場所と、デジタルでのライブ配信を主な拠点としており、その中だけでファンを獲得するには限界があります。「FUKUOKA STREET LIVE」は、アーティストにとって、イベント PR やアーティスト自身の認知拡大のための活動という意味合いが強いですね。

—————アーティスト同士のコラボレーションも起こりそうですね。

酒見：過去にダンス同士のコラボはありました。アーティストが事前に予約した日時を振り分ける中で、同日に同会場で、一時間ずつ複数のアーティストが連続して入っていることがあります。その際は転換（入れ替え）時に、アーティスト同士がコミュニケーションを取って“一緒にやりましょう”という場面はあったりします。

—————ストリートライブではアーティストの収益はありますか。

酒見：「FUKUOKA STREET LIVE」は、投げ銭と物販の収益獲得手段を認めています。物販に関しては、市が所有するスペースでは物販はできないというルールがあるのですが、民間施設のオープンスペースでは、物販が認められています。基本は投げ銭がメインですね。

—————登録アーティストは福岡市在住でなければダメですか。

酒見：そうですね。福岡市在住、および福岡市域で活動されている方です。東京で活動していて、月に1度は必ず福岡で活動している場合は可能です。これから福岡で活動したい、というだけでは厳しいですが、すでに活動しているというアーティストの方を優先的に登録しています。

—————ライブ場所の使用料は必要なのでしょうか。

酒見：「FUKUOKA STREET LIVE」の登録会場に関しては、普段は有料で貸し出しているところも無償で提供してもらっており、使用料はありません。

—————ストリートライブ事業の最終的な目標はなんですか。

酒見：「音楽都市」を文化の視点で捉えたときに、まちなかのオープンスペースで気軽に音楽などに触れ合えるような「音楽のあるより良い都市空間をつくりあげる」ことが目標ですね。ストリートライブはまちの賑わいづくりに欠かせないコンテンツで、都市ブランディングの手段として、とてもわかりやすく機能していくと思っています。

アーティストデータベース「OTOJIRO」は

アーティストの活動の場を増やすことに役立っている

—————音楽都市協議会が福岡のアーティストたちを対外的にアピールする活動について教えてください。

酒見：協議会では、「OTOJIRO」というポータルサイトを設けており、日々のイベント情報や福岡で活動されているアーティストの方や音楽関連事業者の方のインタビューやコラム、特集記事などを掲載しています。

また、福岡で活動されている音楽関連のアーティストの方々に任意でプロフィールを登録いただいている、福岡でどういった方が音楽活動しているのかを一目見て分かるデータベースもあります。

—————「OTOJIRO」のデータベース登録にも選考があるんですか。また、登録したアーティストにはどのようなメリットがあるのでしょうか。

酒見：「OTOJIRO」のデータベースは、基本的に福岡市域を拠点に音楽活動をされているという実績がわかれば、どのような方でも登録可能としています。「アーティスト」、「クリエイター」、「事業者・団体」、「施設」の4

つに分かれていて、絞り込み検索もできます。現在 300 件ほど登録があります。（*2024 年 6 月時点で 464 件）

データベースのアクセス数は高く、アーティストを必要としているイベント主催者からアーティストのブッキング相談を受けて、協議会からアーティストの紹介や斡旋も行っています。最近の事例としては、2023 年 8 月にオープンした宿泊施設「ザ ロイヤルパーク キャンパス 福岡中洲」と年間契約を行っています。館内 2 階のバーラウンジで、毎週金曜、土曜にアーティストに演奏してもらいたいというオファーがあり、協議会からデータベース登録のピアニストやシンガー、DJ などを斡旋しています。

—————他にも契約事例はありますか。

酒見：他の事例としては、単発の催事などへのアーティスト斡旋が多いです。「FUKUOKA STREET LIVE」にも、同様のオファーがあります。実際のパフォーマンスではなく、ホームページを見て「イベントに出てもらいたい。紹介して欲しい」というケースが多いです。案件によっては手数料をいただくこともあります。

—————「OTOJIRO」では施設もデータベース化されていますが、主だった店舗などはすべて紹介されている感じですか。

富田：任意で登録していただいている状況なので、すべてが網羅されているわけではありません。

酒見：「OTOJIRO」立ち上げは 2021 年 8 月ですが、それまでに福岡の主だった音楽施設には挨拶に行き、データベース登録をお願いしました。最近では認知度も少しずつ上がってきたので、自ずと登録してくれるところも増えてきました。

—————福岡市在住のアーティスト、福岡市内の施設に限定されているんですか。

酒見：そうです。協議会の運営は福岡市に大きく依拠しているため、どうしても範囲が福岡市域になってしまいます。

行政が関わっていると、「どうせまた無くなるんじゃないか」と言われる

勝手にビジョンを描いている団体と思われたら、もったいない

—————福岡音楽都市協議会が立ち上がった直後、事務局として困難だったことはありましたか。

酒見：行政が関わっていることで、良くも悪くも周りの理解を得ることが難しかった点ですね。

音楽関連の事業者や施設に挨拶回りに行った際、「いつまで続くんですかね」と言われました。行政が関わっていて、行政からの負担金で活動していると言っている以上、「どうせまた無くなるんじゃないか」と思っている方が結構います。過去にも行政が携わって音楽・文化芸術を支援する団体の実例があり、協議会も同じように見られていることが意外でした。「永続的に活動し、福岡のためになることをやっていきます」と説明しますが、そういう目線を持つ方は最初からあまり関わろうとはしません。そのリレーションをどう開拓していくかは課題に感じました。

どうしても「ああ、やってる、やってる」みたいに他人事になってしまうので、自分事化してもらうためのコミュニケーションをまずはやっていく必要があります。勝手にビジョンを描いて、それを実現させている団体と思われたらもったいないと思います。

—————具体的にどのようなコミュニケーションが必要でしょうか。

酒見：1対1でもグループでも定期的に悩みを聞いたり、その意見を取りまとめて行政に提言するのも協議会の役割だと思いますし、“業界としてこういうことに困っている”と公に向けて発信できる団体でもあると思います。一人の意見だと通りにくいことでも、まとまった意見として広げることができるという役割もあります。

—————実際に、福岡音楽都市協議会にやってもらいたいことなど、具体的に聞いていることはありますか。

酒見：アーティストからは「もっと出演機会やビジネスマッチングの機会が欲しい」という話を聞きます。あとは、「練習する場所が無い」、「スタジオが少ない」、「ちょうどいい規模のライブハウスが少ない」というのがあります。確かに、100人、200人規模のライブハウスが本当に少ないと思います。ちょうどいいサイズのライブハウスが無いんです。アーティストからはそういった悩みを聞きます。

—————アーティストの側はまちに浸透させたいと思っているのに、まちの側が対応できてないということでしょうか。

富田：スタジオやホールなどハード的な環境整備はすぐに実現できるものではないと思いますが、まちの規模に対して音楽に適した施設は充分ではないと思います。

—————福岡というまちの魅力を考えたら、まだまだ出来ることはいっぱいあるという感じですね。

酒見：それは感じますね。

東京に目を向けるより、アジアに目を向ける

コンパクトなまちだからこそ、すぐつながるメリットを活かす

—————酒見さんも富田さんも音楽活動をされていますが、アーティストの立場から見て、福岡のまちをどういう風にお感じになっていますか？例えば、活動しやすさなど。

富田：福岡市は「コンパクトシティ」と言われますが、それはその通りで、知り合いの知り合いは大体繋がっているというような状況がよく起こるんですね。何かイベントを企画実施しようとする、この人に相談したらいいよという風に、繋がりがやすいという点は恵まれているように思います。

私はジャズや昭和歌謡を軸に活動しており、同年代ではライバルが少ないジャンルを選んだということもあって、重宝がってもらえるというか、多方面からお声がけいただく機会は多かったです。

酒見：活動はしやすくなったという感じですね。DJだと、ひと昔はレコードかCDでしたが、今は機材も進化してUSBやPCで気軽にDJができるので、場所を選ばずどこでもできるようになったんですね。10年くらい前はクラブでDJをすることが普通でしたが、今ではクラブ以外の、ホテルや飲食店でも出演しています。最近でもいわゆる「DJバー」が東京中心に流行っているんですが、福岡でも増えています。

先程申し上げた通り、オープンスペースでも機材さえ持っていけばDJができるので、ハードルが下がり、始めやすい環境になったと思います。

—————アーティストが有名になると福岡から流出していくということが起こり得るかも知れませんが、その辺はどのようにお考えですか。

酒見：東京の方が福岡よりもマーケットが大きいので、マスを狙っているアーティストは多いと思います。一方でストリーミングサービスなどの著作権や原盤権の管理代行サービスもあるので、作曲やDTMといったクリエイター

志向のアーティストは、福岡在住のままでも一定の収入がある方もおられます。

生演奏などパフォーマンスすることが目的のアーティストは、比較的東京を目指している方が多い印象ですが、作曲もするパフォーマンスもするみたいな方は、福岡にそのまま残る方もいらっしゃいますね。

—————地元で育ったアーティストが地元で根付いて活動して行く、ということを目論むとすると、どういう施策をすればいいと思いますか。

酒見：個人的な考えですが、福岡を拠点に活動するのであれば、東京ではなくアジアに目を向けた方がいいと思います。福岡音楽都市協議会としては、アジア各国のキーマンとアーティストを繋げる橋渡しの役割を担えると思いますし、それ以外にも何かしらアーティストを支援する仕組みをつくれたらと思います。

実際に今年の3月にそのきっかけづくりとして、協議会主催で「BEYONDERS」というイベントを開催しました。タイのバンドと福岡のバンドが福岡で「コライト」（楽曲を共同制作する手法）する模様を公開したんです。それによってタイのコーディネーターとの繋がりもでき、実際にバンド通しの人材交流も出来ました。そこからさらに、福岡のアーティストがタイの音楽フェスに呼ばれるような、そういうきっかけになったらいいなと思います。国境を越えてアーティストたちが繋がる環境づくりに加え、「コンパクトシティ」である福岡が楽曲制作の拠点としてアピールしていきたいという目的もあります。

プレイヤーを育てる目線と、プレイヤーを増やす目線

—————人材育成についてお伺いしたいと思います。身近で音楽に親しむきっかけがどれだけあるかが大事ではないかと思いますが、その点はいかがでしょうか。

酒見：現状、福岡音楽都市協議会としては、プレイヤーを育てるという目線はあっても、プレイヤーを増やすという側面は、まだ弱いかもしれません。パフォーマンスの機会をつくって、その演奏を見た人の初期衝動になって音楽を始めたいという思いはありますが、戦略的にプレイヤーを増やすためにどうしたらいいかについては、これから考えていくべきフェーズだと思います。

ただ具体的な取り組みとして、プロのアーティストが学校に出向いて、小学生に生演奏を体験してもらう「特別音楽授業」を行いました。普段学校では学ぶことのできない「ロック」や「ゴスペル」といった音楽ジャンルのアーティストを呼んで、小学生と一緒に合奏したのですが、これが音楽を始めるひとつのきっかけになった子もいるかもしれないですね。

富田：また、協議会が事務局を置いている福岡市文化芸術振興財団でも市域の小学校に向けて文化芸術に携わるアーティストを派遣するアウトリーチ事業をやっています。具体的には筑前琵琶という福岡の伝統楽器や室内楽アンサンブル、能・狂言などが事例にあげられます。2025年度以降、音楽都市協議会もそこに何か関わりができる可能性があります。少しでも“音楽っていいな”と思ってもらえるきっかけづくりには取り組んでいきたいですね。

※2025年度より福岡音楽都市協議会からアウトリーチ事業に向けたアーティスト推薦を行い、ジャズピアニストとベーシストの派遣が決定。

無料にも善し悪しがある

投げ銭文化を育てられないか

—————ナイトタイムエコミーに対する動きは、福岡ではいかがですか。

酒見：ナイトタイムエコミーとインバウンドの相性はいいと思うのですが、やはりコロナでインバウンドが来なくなった間、ナイトタイムエコミーは下火になりました。ようやくこれから本格実施になると思います。その一環として、中洲近郊の「春吉橋」では、夜間にムービングライトで上空を照らすパフォーマンスや、その周辺では飲食店の屋台が出店するイベントが行われています。福岡市も参画していて、夜遅くまでやっています。

—————インバウンドが音楽イベントやライブハウスに積極的に行くようになるといいですね。

酒見：そうですね。「OTOJIRO」では現在、音楽マップを制作しています。

富田：音楽マップは、市域のホール、ライブハウス、バー、カフェといったミュージックスポットをマップ化するものです。昨年「OTOJIRO」を多言語化して 9 か国語に対応しているので、行く行くはインバウンドの方々にも使いやすい仕様になりたいですね。

—————福岡ではどれくらいの方がライブに行かれるのでしょうか。データはありますか。

富田：データはありませんが、福岡市域で開催される大規模な音楽イベントの中には入場無料のものも多く、世代を超えてたくさんの方々が賑わっています。

酒見：その点は音楽イベントが無料であることに慣れてしまっているのではという懸念があります。まちなかで開催される無料の音楽イベントに、普通だったら無料では見ることができないような大物アーティストが出演しています。そういった状況に慣れてしまって、お金を支払ってライブハウスや音楽イベントに行くということが、「お金もつたいたい」ことのような感覚になっていないかと勝手に推測しているんですが…。

富田：地元アーティストからも同じような声を聞いたことがあります。入場料など対価を払って、アーティストの演奏を聴くという習慣がなかなか根付かないことはまち全体の課題ですね。

酒見：昨今では飲食フェスなども増えているじゃないですか。無料で入場できるフェスの賑やかしとして、音楽アーティストは欠かせないコンテンツです。無料で入場できて、たくさんの方が動員されるイベントで、アーティストがパフォーマンスをする機会も多く、お金を払わなくても音楽を楽しめる環境が自然と存在していることは大きな要因ですね。一方で無料だからこそ初めて出逢うアーティストのパフォーマンスに触れてファンになるケースもあると思いますので、無料って本当に善し悪しがあると思います。

—————そういえば、許可されていないストリートライブでも、投げ銭している人を見た記憶があまり無いですね。

酒見：福岡は投げ銭文化が根付いてないと思います。その点、大道芸のアーティストなどは投げ銭を促すためのテクニックを持っている印象で、音楽のアーティストは慣れていないというか、ただ単に演奏して終わりになってしまう場面が多々あります。

富田：福岡は山笠やどんたくなど祭りの文化もありますが、そこで一気に盛り上がるという習慣も、福岡からアーティストが多数輩出されてきた気質を形成している反面、祭りはもちろん無料で楽しめますし、パフォーマンスに対価を支払うことをためらう理由なのかも知れません。

福岡の音楽の歴史に触れるきっかけが無い

過去と現在の音楽のつながりが断絶している感がある

—————福岡は多くのミュージシャンを輩出してきましたが、その点はいかがですか。

富田：50代以上の世代は、シーナ&ロケッツやロッカーズといった「めんたいロック」や、チューリップや海援隊などの「照和」を拠点としたフォークから、郷ひろみや松田聖子まで福岡は芸どころといった認識が強いと思います。30代以上だと椎名林檎やスピッツなどでしょうか。各々が体感した時代によって、地元の音楽シーンへの認識の違いはあると思います。

—————断絶があるんじゃないかということですか。

富田：かつて地元から巣立ったアーティストに続いて世に出ようという意識は薄れている印象は受けます。

—————それは、世代的なものでしょうか、それとも福岡の気質なんでしょうか。

富田：福岡の人はすごく福岡が好きという気質があると思います。それが音楽という側面になると、福岡でどういう音楽シーンが形成されてきたかを知るきっかけが少ない。例えば音楽をテーマとした博物館や常設の展示はありませんし、郷土の音楽に関する資料も散逸していて体系的にまとめたものはありません。個人的にも福岡の音楽史について研究・執筆を行っています。アーティストにとって必ずしも重要なことではないのかもしれませんが、地元のルーツを知っておくことは有意義なことだと思います。

—————酒見さんも断絶感を感じますか。

酒見：若干は感じますね。いま若い世代でも福岡から有名になっているアーティストは結構いるんですよ。でも昔のアーティストとは目指すものが違うと思います。昔のアーティストは片道切符で東京へ飛び立ち、武道館に出るとか、紅白に出るとかが目標だったと思いますが、いまのアーティストは全然そんなことがなくて、どちらかというと自分が楽しいことをやって、それで有名になってマネタイズできればいい、くらいの感じになっているように感じます。東京を目指す人も勿論いますが、ストーリーミングサービスで世界中の人に知ってもらって、そこから有名になるみたいなケースも結構ある話ですから、有名になるまでの道筋が変わっているように感じます。

パフォーマンスしやすい公開空地があればいい

アーティストに優しいまちであればいい

そうすれば、移住者も増える

—————音楽する側の個人として、これからどんなことを期待されますか。

酒見：アーティストという立場で言うと、先ほど言ったように出演機会がほしいですね。音楽で食べていくという目線も入れると、ギャラの単価を上げてほしい。実力にもよりますが、相対的に福岡はギャラが安いと思います。“アーティストのギャラはタダでいい”という声もあって、イベントによっては“ドリンクは好きなだけ飲んでいいから”という感じでギャラを払わない主催者も一定数いるんです。

一方で、集客力のあるイベントには、PRのために無料でもいいから出たいというアーティストも多い印象です。もちろん認知を広めることは大事なことです。出演する以上は、実働対価として最低限でもお金をもらうというくらいのスタンスで臨まないと、アーティストのレベルも上がらないと思います。出演機会とギャラの単価が上

がれば上がるほど、音楽で食べていくということに直結するじゃないですか。

福岡は「天神ビッグバン」で、まちなかの古い建物がどんどん建て替わっていますが、公開空地をつくる段階でパフォーマンスに優しい環境にしてほしいですね。電源が取りやすいとか、スピーカーが常設されているとか、ナイトタイムエコノミーのことも考えて照明もあるとか。ステージ仕様とまでは言いませんが、パフォーマンスがしやすい空間を最初から整備してほしいと思います。

総じてアーティストに優しいまちであつたらいいなと思うんです。やっぱり駆け出しのアーティストってお金が無いですから、そこを支援する、負担を減らすみたいな取り組みをやっていきたいですね。そうなれば移住者も増えそうな気がします。結果的に産業全体の振興にも繋がるはずですよ。

—————「都市」というリアリティと音楽のリアリティをどのように人々に伝えられると思われませんか。

酒見：福岡にメタバースをつくっている会社があつて、その社長の方と“天神をメタバース化してライブ配信したら面白いんじゃないか”みたいな雑談をしたんですよ。実現するかどうかは分かりませんが、メタバースに世界中の人がアクセスして、天神のまち並みをメタバース上で知ることができて、かつリアルタイムでアーティストの生演奏を見る……今っぽいし、あり得る話かなという気はします。

少し話がそれましたが、今自分がここに住んでいる、ここを歩いている、ここで楽しんでいる、といった都市との能動的な関わりを持っているリアリティはその生活の中で必ず音楽というものが存在していると思っています。まちなかで流れるストリートライブの音楽やさまざまな場所で行われる音楽イベントなど、風景としての音楽は都市生活者にとって贅沢な体験となり、街と音楽の記憶として刻まれていくのだと思います。

<参考>

福岡音楽都市協議会の概要

[福岡音楽都市協議会]

福岡音楽都市協議会（MCCF）は、「福岡を日本・アジアを代表する音楽都市へ」をビジョンに掲げ、2021年4月に設立された任意団体。音楽の分野において、幅広いジャンルのアーティストや、市民、団体によって多彩な活動が生まれ、都市の大きな魅力となっている福岡で、「音楽」を関連産業や観光、さらにはまちづくりの観点から活用・振興を図るため、市内で音楽関連の活動等を行う事業者・個人などをはじめとした、さまざまな立場の人が横断的に交流し、育成を行う組織。

<福岡音楽都市協議会メンバー>

- ・会長 福岡市文化芸術振興財団 理事長 石原 進（JR九州特別顧問）
- ・顧問 福岡市 市長 高島 宗一郎
- ・監事 福岡市経済観光文化局 理事 吉田 宏幸
- ・理事 日本ゴスペル音楽協会 理事 寒竹 麻衣子
- ・理事 NPO ティエンポ・イベロアメリカノ理事長 サンティアゴ・エレラ
- ・理事 公益財団法人九州交響楽団 専務理事 本田 一郎
- ・理事 九州大学芸術工学研究院 准教授 城 一裕
- ・理事 筑前琵琶保存会 会主 寺田 蝶美
- ・理事 福岡ミュージックマンス主催者会 会長 深町 健二郎

<事業内容>

- ① WEBメディア事業：キュレーションメディア「OTOJIRO mccf.jp」の活用
 - ・音楽イベント等の情報発信
 - ・データベース登録（福岡のアーティスト、音楽関連事業者）
 - ・ビジネス向けページの設置
 - ・音楽MAPの設置(予定)
- ② 人材育成事業
 - ・データベース登録者向けセミナー：クリエイティブセミナーの実施
 - ・コライティング（共同楽曲制作）：「BEYONDERS」イベントを開催し、福岡の若手バンド×タイおよび台湾のインディーズバンドのコライティングセッション等を実施
 - ・小学校での特別授業：「スクール・オブ・ロック in 草ヶ江 SHOW 学校」
 - ・人材育成プログラムの実施
- ③ 業者間・異業種交流事業
 - ・会員、異業種交流会：「FUKUOKA MUSIC SUMMIT」、「ミートアップパーティ」実施
 - ・ビジネスマッチング：データベース登録アーティストの各種イベントへの斡旋

④ まちの賑わい事業

- ・「FUKUOKA STREET LIVE」：まちなかのオープンスペースでアーティストパフォーマンスを 237 ステージ実施
- ・「FUKUOKA STREET PIANO」：ベイサイドプレイス博多、ソラリアプラザに設置
- ・「サウンドスケープ」：九州大学芸術工学研究院と連携した「音環境デザイン」の社会実験

※参考までに一般社団法人 We Love 天神協議会所管の「Fukuoka Music Month」：福岡で 9 月に開催される 5 つの音楽イベント（「糸島 SUNSET LIVE」、「九州ゴスペルフェスティバル in 博多」、「FUKUOKA ASIAN PICKS」、「MUSIC CITY TENJIN」、「NAKASU JAZZ」）を「Fukuoka Music Month」として集結。広域集客などによる街の賑わい創出と音楽産業の振興を目指す。

→音楽による都市ブランディングのコンサル会社「サウンド・ディプロマシー」の目に留まり、メルボルンの「MUSIC CITIES CONVENTION」で福岡の取り組みをプレゼン。2026 年の福岡開催を目論んでいる。

※その他の事業

- ・「福岡音楽都市協議会支援自販機」をコカ・コーラの協力のもと 3 台設置：売上金の一部を音楽の文化・産業振興、まちづくりに活用

High-Life

「都市×知」
音楽都市のエコシステム
Music City Eco-system

<研究メンバー>

服部 圭郎	龍谷大学政策学部 教授
紫牟田 伸子	株式会社Future research Institute 代表
水本 宏毅	株式会社読売広告社 都市生活研究所 エグゼクティブリサーチディレクター
榎本 元	公益財団法人ハイライフ研究所 主席研究員

<表紙デザイン>

伊藤 愛	株式会社ソフトマシーン
------	-------------

発行 2024年7月
発行所 公益財団法人ハイライフ研究所
〒104-0061 東京都中央区銀座1-8-14 銀座YOMIKOビル8F
TEL03-3563-8686 (代表) Fax03-3563-7987
<https://www.hilife.or.jp/>
©公益財団法人 ハイライフ研究所
©株式会社Future research Institute
